

特集「ランドスケープ研究の潮流と展望」にあたって 拡大する視座～ランドスケープ研究のミックスアップ

Overview of “Currents and Perspectives of Landscape Research”

細野 哲央*
Tetsuo HOSONO

1. 企画の趣旨

日本造園学会では、1995年および2008年に、それぞれ「ランドスケープ研究の現在」、「ランドスケープ研究の動向」として本誌に研究レビューが特集として組まれていた。2010年からは、定期的な研究レビューが学術の到達点を示すマイルストーンとしての意味を持つとの観点から、隔年でレビューが行われている。今回の特集は2014年本誌78巻1号以来の研究レビューとなる(表-1)。

本誌における従来の研究レビューでは、本誌に掲載された論文を中心に、前回のレビュー以降の研究の動向を把握することに力点が置かれていた。しかし、インターネットの普及による情報化社会が進展するなかで、昨今は個人で研究の動向を把握することは格段難しいものではなくなっている。本誌研究レビューとしても、一定期間内に行われた研究を単純に列挙するだけでは学会員にとって魅力的な情報たりえないとも考えられた。そこで、今回の研究レビューでは、研究を網羅することは目的とせず、レビュアーの個性を活かした「視座」と「視点」からレビューテーマを絞って論じていただくことで、読み物としても興味深い内容となることを目指した。

2. レビューの構成

レビュー対象は、下記の6分野7領域からなる。

- ①造園学原論・造園史分野：庭園史
- ②造園学原論・造園史分野：公共空間史
- ③造園材料・施工および管理分野：施工・維持管理技術
- ④造園計画分野：環境に対する行動・心理・生理
- ⑤都市及び地方計画分野：観光・レクリエーションの展開
- ⑥ランドスケープ・エコロジー分野：エコロジカルデザイン、プランニング、マネジメント
- ⑦ランドスケープと情報分野：環境情報の収集・解析

「観光・レクリエーションの展開」を除くといずれのレビュー対象領域も前回のレビューは2012年以前に遡る。レビュー対象期間は、基本的には前回のレビュー以後であるが、必然性があるならばそれ以前の研究にも言及していただくこととした。また、レビュー対象となる研究の学術領域には制限を設けることなく、国外の研究の動向についても可能な限り言及していただいた。

3. レビューの紹介

(1) 庭園史

東日本大震災で被災した文化財庭園が高い精度で復旧されたことが指摘され、その背景には庭園修理技術がこの20年間で急速に向上し、各地の文化財庭園の保存修理事業報告書として蓄積された事実があることが示された。

近年の研究の動向として、作庭記研究を始めとする平安時代の庭園に関する研究が盛んにおこなわれていること、海外の日本庭園に関する研究がこの10年間で大きく進展したことが示された。また、庭園がどのようにしてつくられてきたのかを問う技術史・造形史的観点とともに、なぜ、何を目的としてつくられたのかを実証的に追及する視座が積極的に導入されていることが挙げられている。

さらに、造園学以外の研究分野の研究者が多数参画し、以前にも増して多様な視座からの取り組みがなされている傾向が指摘された。とくに海外では日本庭園のホスピタリティに注目が集まっていることが報告されており、医療関

表-1 2008年以降のレビュー対象領域

分類	領域 細分類	2008年	2010年	2012年	2014年	2016年
		72(1)	74(1)	76(1)	78(1)	80(1)
造園学原論・造園史	造園学原論	○	○	-	○	-
	庭園史	○	-	○	-	○
	公共空間史	○	-	○	-	○
造園計画	ランドスケープデザイン	○	-	○	-	-
	公園緑地等の計画・管理	○	○	-	○	-
	風景計画、自然風景地の計画・管理	○	○	-	-	-
	環境に対する行動・心理・生理	○	-	-	-	○
都市および地方計画	都市計画、都市政策、地方・国土計画	○	○	-	○	-
	まちづくりとコミュニティ	○	-	-	○	-
	里山研究の新しい系譜	○	-	○	-	-
	観光レクリエーションの展開	○	-	-	○	○
ランドスケープ・エコロジー	ランドスケープの構造・機能・変化	○	-	-	○	-
	エコロジカルデザイン、プランニング、マネジメント	○	○	○	-	○
	農村の生物多様性(2010年のみ)	-	○	-	-	-
造園材料・施工および管理	造園材料	○	-	-	○	-
	緑化技術	○	○	-	-	-
	施工・維持管理技術	○	-	○	-	○
ランドスケープと情報	環境情報の収集・解析	○	-	○	-	○
	情報環境のデザイン	○	-	-	-	-

*千葉大学大学院園芸学研究所

係者による実践事例があることも紹介された。

(2) 公共空間史

公共空間を多くの人々に認識・利用されることが可能な空間と捉え、空間を公共化する手段として、①指定、②整備、③認識による共有、④利用による共有があることが指摘された。

①については、自然公園や文化財保護法、保全樹林地区などの指定による公開、②については、都市公園における洪水対策や「緑のリサイクルの実施」などの多様な観点からの整備、市民農園や屋上緑化などの整備が挙げられた。③については、都市公園、自然公園、ビオトープ、市民農園などの計画や管理における住民参加が、空間に対する認識の共有につながるということが指摘された。緑地の存在を住民が認識するための仕掛けに関する事例についても紹介され、新たな文化的景観資源を発見し資源同士を結び付けていくことで認識の共有化を図る可能性も示された。④については、課題として空間においていかに利用の観点を取り入れるべきかを検討する必要があることが指摘された。

(3) 施工・維持管理技術

近年の施工・維持管理分野の論文の内容は、環境要因と生長反応、植物の機能、維持管理の評価、造園材料の4つに分類できることが指摘された。

地域制や伝統性の視点から材料を見直すことの重要性が指摘されるとともに、利用者や利害関係者が複雑な公園緑地や街路においては、維持管理の方向性を定める指標としての評価手法の検討が重要課題であることが指摘された。また、緑地などの施工・管理業務に近接するテーマを扱う環境要因と生長反応に関する論文の内容が業務に還元されることが重要であると論じられた。

樹木を対象とする短期間の実験で妥当性と普遍性を高めるためには、単独の実験に依らない多様な環境、個体を対象とした実験結果の蓄積が必要であることが指摘されている。さらに、施工・維持管理に関わる実務者の視点から、即決即断しなければならない現場で、判断の基礎的、客観的情報としての学術論文の援用は有効に機能すると論じ、現場の課題を学術論文としてどのように表現していくかも大きな課題であることが指摘された。

(4) 環境に対する行動・心理・生理

人の健康に対する行政の指針はこの15年ほどの間に大きく動き出しており、「治療する医学 (cure)」から「予防する医学 (care)」への転換期であることが指摘された。そのうえで、疾病治療が主体であった時代から予防医学の時代を迎えたことで、自然環境や緑地、植物を扱うランドスケープの分野においても人の健康に貢献できる可能性が大きく広がったことを論じている。

ランドスケープの分野では、都市緑地が存在することによる健康効果の検証から、利用することによる効果検証へ

と展開し、研究事例が積み重ねられていることが示された。最近では医療・福祉分野でも、緑地の存在や利用による健康への影響に関する研究が注目されており、緑地は直接的・間接的に健康状態に影響を及ぼしている可能性が高く、運動頻度の向上や孤独感の緩和など多面的な機能を有していることが示されている。

緑地には地域における健康増進方策の一環としての役割が期待されており、今後、地域における健康増進を検討するためには、学際的観点や多面的な角度から住民の健康状態へ及ぼす影響を評価することの重要性が指摘された。

(5) 観光・レクリエーションの展開

「持続可能な観光」として、「エコツーリズム」や「グリーンツーリズム」、「ヘリテージツーリズム」など地域の自然・文化資源に沿った観光の形態が国内外で発展してきたことが指摘された。研究の動向もこれらに関するものが多く、中でも地域の観光推進や観光資源の保全を担う組織の機能や役割など、観光地経営に関する研究が増えていることが示された。一方で、これらの研究には人材の育成と推進組織に課題があることが指摘されている。また、観光客、観光事業者、地域住民といったステイクホルダーそれぞれの立場を総合的に考慮し評価する研究が求められると指摘された。

(6) エコロジカルデザイン、プランニング、マネジメント

新たな潮流として、①自然資本の多機能性を活用した社会・経済に寄与する国土形成手法である「グリーン・インフラストラクチャー」、②生態系を基盤とした防災・減災、③自然科学的生態をデザインの媒体として捉え、都市化された地域に新たな生態的環境を創造する概念「ランドスケープ・アーバニズム」が挙げられている。

東日本大震災後は「グリーン・インフラストラクチャー」の減災・防災機能に着目した生態系を活用した災害リスクの低減が注目をあつめるようになり、様々な学協会の提言に盛り込まれたことが示された。また、「ランドスケープ・アーバニズム」は、震災を経た我が国にランドスケープ・アーキテクトが分野や空間の垣根を超えて主導すべき生態系を基盤とした都市計画・サイトデザインへの潮流を起こしたと指摘されている。

「グリーン」という言葉は曖昧で時として学術上問題となるとしながらも、「グリーン・インフラストラクチャー」という共通言語が建築・土木・都市計画・生態学等、様々な分野で認識され使用されることが重要であると指摘された。また、これらの分野と「グリーン・インフラストラクチャー」の概念を様々なスケールでの実践を通して調整することがランドスケープ・アーキテクトの役割であると論じられた。

(7) 環境情報の収集・解析

近年の測量は、従来の技術に「GNSS (Global

Navigation Satellite System)」、「GIS」、「リモートセンシング」、「レーザ測量」といった先端技術を加えることで、「空間情報技術」として一本立ちしつつあると指摘された。また、空間情報技術の利用は物理的な長さや面積だけでなく、空間を構成する多種多様なデータの取得を可能とするため、土木のみならず農業、林業、防災といった様々な分野において応用されていることが指摘されている。

我が国では阪神・淡路大震災を契機として「GIS」の研究が本格化したと言われているが、造園分野の研究においては土木や都市計画に比べると災害に対してGISが積極的に活用されているとは言えない状況も指摘された。

「地上レーザ測量」における地上型レーザスキャナは、造園分野においては有用なツールであり、地形や植物、構造物を中心に応用がなされていることが示された。一方で、器材の低価格化や他の器材との複合利用、データの軽量化などに課題があり、その技術が広く普及するには造園分野の努力だけではなく計測やコンピュータビジョンとのコラボレーションが望まれることが指摘された。

4. 拡大する視座～ランドスケープ研究のミックスアップ

今回の研究レビューでは、レビューに個性的な切り口で自由に論じていただいた。その結果、ランドスケープ分野の研究対象に対峙する姿勢や立場、すなわち「視座」のさらなる多様化を各レビューに共通するキーワードとして見出すことができると思われた。すなわち、「庭園史」では、造園学以外の研究分野からの取り組みがなされている傾向が指摘され、海外では日本庭園のホスピタリティに関して医療分野からの実践例があることも紹介された。「公共空間史」では、多様な観点からの共有地の整備、新たな文化的景観資源を発見することによる認識の共有化、利用の観点を取り入れた共有化が空間を公共化する手段として挙げられた。「施工・維持管理技術」では、施工管理現場では

学術論文によるエビデンスが判断の指針となることと研究者の立場から現場の課題とその解決を学術論文として成立させることについての課題が論じられた。「環境に対する行動・心理・生理」では、医療・福祉分野でも、緑地の健康効果に関する研究が注目されていることが示され、学際的観点や多面的な角度からの評価が重要であることが指摘された。「観光レクリエーションの展開」では、多様なステイクホルダーの立場を総合的に考慮し評価する研究が求められていることが指摘された。「エコロジカルデザイン、プランニング、マネジメント」では、生態系を活用した災害リスクの低減が、様々な学協会の提言に盛り込まれたことが示され、建築・土木・都市計画・生態学等、様々な分野で「グリーン・インフラストラクチャー」が共通言語化されることが重要であると指摘された。「環境情報の収集・解析」では、新しい測量技術が広く普及するには造園分野の努力だけではなく計測やコンピュータビジョンとのコラボレーションが望まれることが指摘された。

大前提として、複合領域であるランドスケープの研究は他の分野との交流が生まれやすい素地を持っている。また、ランドスケープの空間には通常、多様なステイクホルダーが関わっており、多様な立場からの複数の「視座」が並立していることは当然でもある。今回の研究レビューではその「視座」が新たな広がりを見せていることが示唆されている。これまで異分野とされてきた領域からのランドスケープ研究への取り組み、あるいはランドスケープ分野からのこれまで異分野とされてきた領域に関する研究への取り組み、これらによって生まれる相互作用は、それぞれの学術領域における研究の視野を広げ深化させる「ミックスアップ」の効果を生む可能性をもっている。換言すれば、「視座」の拡大は、ランドスケープ研究の新たな展開の萌芽であると受け止めることもできよう。

読者アンケートのお願い

編集委員会では、今後の誌面づくりの参考とするため、特集内容に関する学会員の皆さまからのご意見を募集しております。件名に特集タイトルをご記入の上、①氏名、②所属、③連絡先(e-mailなど)、④特集に関するご意見等(400字程度)を下記のアドレスまでご投稿ください。なお、ご記入頂きました個人情報につきましては適正に管理し、ご意見の内容に関する連絡等に利用させて頂く場合がございます。ご意見に対する個別の回答は致しませんのでご了承ください。

[読者アンケート送信先アドレス: hensyu@jila-zouen.org]